Newsletter from the Free workers' federation

自由労働者連合

la Federacio de ChifonProletoj

横江嘉純 作
大杉栄のブロンズ首像

BOTTOMS

第18号

Spring, 2019

奥宮健之と車会党

浦底平吹

車会党。これは日本で初めて都市の底辺下層労働者を組織した労働組合と思われる。底辺下層に依拠する労組の一員として、車会党を主導した奥宮健之と車曳き（人力車夫）について少し書き留めておきたい。

奥宮健之の父・正由は土佐藩の陽明学者であり、土佐勤王党の援助者であった。幼少から父の影響を受けながら英学も吸収した奥宮は自由民権左派の論客・活動家として 1881 年の自由党草創期に加入し、その後、1882 年に車会党を組織し、名古屋事件での無期懲役の後に「特赦」を受け、15 年後の 1910 年の大逆事件で処刑された。彼は「共和政体」を論じ、「最大多数の最大幸福論」（ベンサム）と「天賦人権論」（ルソー）をベースとしていた。旧南部藩主がひらいた英学の共慣義塾で学び、1874 年に板垣退助や片岡健吉、林有造らが立志社を起こし、植木枝盛や尾崎行雄、犬養毅らと共に奥宮もそこで学んだ。1876 年に東京の旧土佐藩主邸でひらかれた海南私塾に招かれ教員となった。1879 年には私塾育英舎を自ら開き、当時の最高水準と思われる英学を一人で教授した。

奥宮健之

奥宮はベンサム流のイギリス自由主義を吸収し、同時にルソー流の天賦人権思想を受容している。襤褸を纏う底辺下層の貧民や無宿人であろうが皇族華族であろうが人に上下はない、「天は人の上に人をつくらず」である。そして、最大多数たる底辺下層の人々の最大幸福を目指す取っ掛かりとして着目したのが、近代欧米化（帝国主義化）に躍起な明治政府肝煎りの馬車鉄道着工で迫害を受けて失業・困窮する人力車夫たちの組織化だった。

130 年前の人力車夫と現代の野宿者の労働と生活

人力車夫について少し述べたい。横山源之助の『日本の下層社会』（1899 年）によれば、1890 代末頃の東京の下層労働は日稼人足が最も多く、次に人力車夫であり、続いて屑拾、人相見、下駄の歯入れ、水撒き、按摩、かっぽれ、辻三味線等の都市雑業がある。『最暗黒の東京』（松原岩五郎／1893 年）では東京の人力車夫を 6 万人と推測している。また、人力車夫は紳士専属の「おかかえ」、車屋の宿舎住みの「やど」、稼ぎ場を確保するとともに互助組合的な役割を持つ「ばん」、人力車夫の多数を占め貧民街に住む 7～8 割が所属の定まらない「もうろう」の 4 つに区分される。「おかかえ」と「やど」はまだ稼ぎは良いが、「ばん」や「もうろう」の稼ぎは低く、貧民街の長屋に住めるか住めないかという状態である。

分かりやすい例を現代の野宿者の仕事から見てみよう。リヤカーを寄せ屋から借りて段ボールやアルミ缶を回収して日銭を稼ぐ寄せ屋労働者がまる一日中働いて得られる収入は約 500～800 円ほどだ。そのうち、リヤカーの賃貸料を引けばその半分程度が手元に残る。自転車でアルミ缶を回収して日銭を稼ぐ者も、山盛り積み込んで 10kg ほどなので、毎日良く回収できてもリヤカーの寄せ屋労働者と同じほどの収入である。釜ヶ崎などの寄せ場のドヤ（簡易宿泊所）が 1 日 1000 円前後のため、寄せ屋労働者やアルミ缶回収に従事する労働者は必然的に野宿を余儀なくされる。そして、エサ取り（コンビニの賞味期限切れ廃棄弁当やマクドナルドの廃棄商品を拾い集めること）で凌ぎ、数日蓄えたお金でドヤでの休息が可能となるようなものだ。勿論、長期で借りているリヤカーを無料で停められる気の利いたドヤなど現代の寄せ場にあるわけもない。また、アルミ缶や段ボール回収を一日休めばその回収コースが同業者に奪われる可能性があるため、病気にでもならない限り休めないのが通常だ。不安定で低収入故に野宿を前提として成立する労働であるので、実際にドヤに泊まる寄せ屋労働者はほぼいない。

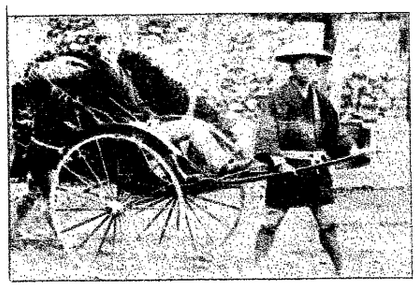
現在、釜ヶ崎では寄せ場の中心的機能である西成労働福祉センターが 2019 年 3 月末をもって閉鎖され、その機能の一部は仮庁舎への移転が決まった。寄せ場解体と日雇労働者制度の再編・廃止を視野に入れたこの策動については、紙面を改めて論ずることにしたい。ここでは、労働センター閉鎖にともないセンター周辺で野宿する釜ヶ崎労働者が休息の場と寝場所を失うことに関して触れておくこととする。2000 年代に公園や河川敷、駅ターミナルのテント・段ボールハウスを排除する時に使う行政の常套手段は、園内収容所「シェルター」や舞洲の自立支援センターへ送り込むか、最終手段として「伝家の宝刀」行政代執行で叩き出すか、さもなくば生活保護をチラつかせて懐柔しながら自主退去へと追い込み、野宿者の自主的コミュニティーを解体してきた。労働センター閉鎖でも同じような手法が担当部署より既に提示されている。

段ボール・アルミ缶・廃品回収や雑誌・賞味期限切れ弁当回収、輪番で月 3～4 回の道路清掃に従事する高齢者特別就労など底辺の様々な都市雑業に就いている釜ヶ崎労働者（特に高齢層）の多くは野宿をしており、収入は少なくても生活保護ではなく働くことを選んでいる仲間も多い。しかし、それ故に先にも触れたように回収した資源とともに野宿をするという生活を採らざるを得ない。大阪市の担当部署は「家賃補助」をチラつかせているが、それが如何に現実の労働実態にそぐわないものであるのかの感覚が「市民社会」に生きる小役人たちには解らないのだ。

人力車夫の「懇親会」から「演説会」へ

話を 137 年前の奥宮健之の時代に戻そう。1882 年 8 月、奥宮は三浦亀吉と懇意になった。三浦は元は「やど」の挽子（ひきこ）をしていたが、岩崎弥太郎の「おかかえ」から大井憲三郎の「おかかえ」を勤める中で自由民権思想に刺激されるようになった。駿河台のニコライ下で「やど」の棟梁になった後も奥宮や植木、宮部襄、桜田百衛らが出入りしていたので自由民権サロン的な空気を吸っていた。小柄で腕っぷしが良く、車曳きの世界ではちょっと名の知れた名士だったそうだ。

奥宮は桜田と共にその三浦に人力車夫の組織化を持ちかけ賛同を得た上で、奥宮の弟子の雨森真澄を人力車夫として潜入させた。雨森が東京一円の人力車夫の馬場を回ってビラを撒き、1882 年 10 月 4 日、300 名にのぼる人力車夫が神田明神の境内に結集し、「人力車夫懇親会」という集会を持つに至った。



気を良くした奥宮らはその後も 10 月 7 日、8 日、9 日と東京各地で懇親会を開催した。マスコミも面白がって彼らを「車会党」と呼び、奥宮らも「車会党規約」を作って彼ら自身の組織を具体化した。11 月 24 日には浅草井生村楼で 2000 人を集めて「車夫政談演説会」を開催した。宴もたけなわの中で植木枝盛や奥宮ら自由党の壮士、三浦ら車夫たちの演説…という訳にはいかず、あらかじめ官憲が目を付けた 6 名の演説を許可しなかった。それでもなお 2 人目の久野初太郎の「腕力論」の演説で官憲が中止・解散を命じる始末だ。官憲には懇親会に移ると宥めすかしたと思えば、その場に座り込んで「懇親会」という名の演説会が始まる

のだ。愉快至極。

車会党が目指すところは相互に親和、親睦して同盟し、馬車鉄道撤廃と人力車夫の人間としての自由と平等の権利を訴えることだろう。奥宮や車会党に集う人々に欧米流の労働組合の知識がどれほどあったのかどうか定かではないが、その内実は人間らしく生きていくために団結して国策企業の圧迫を跳ねのけ労働権を防衛する労働組合そのものと考えて差し支えないものだろう。

残念ながら、別日に奥宮は三浦らと酒を飲み酔っ払った勢いで官憲に喧嘩を売って監獄に放り込まれ、指導部を失った車会党は瓦解してしまった。私の周辺でもよくあるあまり笑えないネタ話のようだ。それにしても、車夫などの都市雑業に従事する底辺下層の人々の中に同志らと共に分け入り、自由民権論をぶち上げ酒を酌み交わす奥宮の姿に、「ヴ・ナロード」と叫んだロシア青年活動家の姿と重なる。底辺下層を見下すマルクスのルンプロ論など入る隙間もない瑞々しい感性に拍手喝采である。

奥宮健之らが蒔いた底辺下層の団結の火種のゆくえ

このところ、天皇の代替わりとやらで支配階級は慌ただしい様子で、皇太弟になる秋篠宮家も婿殿の金銭問題でバタバタだ。幼少期に幕藩体制の瓦解から明治天皇制政府の樹立を見てきた奥宮の時代はどうだっただろうか。結論から言えば、ネッケル・フレーの『共和原理』を翻訳はしたが「人民の共和」という立場をとらず「君民共和」を理想の政治体制とするなど、彼は幼少から叩き込まれた幕末維新の尊皇攘夷思想と儒学思想とによって、大逆事件でくびり殺されるまでその呪縛から解放されることはなかったようだ。また、車会党を組織した1882年8月の1ヶ月前、日本による開国強行に対して朝鮮軍部が反乱を起こした（壬午軍乱）が、奥宮は福沢諭吉の如く「征韓論」を掲げて大陸への国権の伸長を主張した。そして、日本は軍隊の朝鮮駐留権を手に入れ、朝鮮植民地化と大陸侵略への足掛かりとした。

自由民権派はフランス革命史やルソーの思想を取り入れはしたが、第一インターナショナルの国際主義を掲げるのは平民社からだ。しかし、国学派の尊皇攘夷思想や儒教思想に毒された時代的な制約のある奥宮健之や同じく国体護持を論じた初期の幸徳らを、現代の思想的地平を生きることのできる私たちが無前提に批判したり冷笑したりすることはまったくフェアではないということは言うまでもない。私たちは先達が手探りで苦闘しながら為した／為そうとした様々な成果や教訓を拾い集めて糧にしよう。

「何等世ニ功ナク人ヨリハ常ニ誤解セラレ其侭墓穴ニ入ルハ終天ノ恨事」「死后此冕丈ケ知ル人アレハ私ノ霊ハ地下ニ瞑シ候」（死刑判決の翌日、兄正治に宛てた書簡）

奥宮や三浦らが都市の底辺下層に蒔いた労働者の団結の火種は、『最暗黒の東京』が書かれた1892－93年頃にも車夫の間で燻り続け、1897年に全国各地で鉱山、工場、職工などのストライキ闘争が激発し、「労働組合期成会」が設立されるに至るも大逆事件での無政府主義者・社会主義者に対する徹底的な弾圧の時代を経て、1920年代に地中深くから再び芽吹くまで待たなければならない。

【参考文献】
『自由民権の先駆者 奥宮健之の数奇な生涯』絲屋寿雄（1981年）
『大逆事件－死と生の群像』田中伸尚（2010年）
『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース 1960－2009合冊版』（2010年）
『大逆事件』尾崎士郎（1959年）
『日本の下層社会』横山源之助（1899年）
『最暗黒の東京』松原岩五郎（1893年）

添田唖蟬坊 ― 近代日本の自由人たち(3)

私は、黴(かび)にも花が咲く、といふことを唄ひたいのである。

長井瘋癲

1. 添田唖蟬坊（そえだあぜんぼう 1872年12月25日-1944年2月8日）
明治・大正期に活躍した演歌師の草分け。本名は平吉。号は自らを「歌を唄う唖（おし）の蟬」と称したことに由来。別号に不知火山人、浮世三郎、おぼろ山人等多数。著書には『浅草底流記』（1930）、『唖蟬坊流生記』（1941）がある。

『アサヒグラフ 1951年6月13日号』によれば、
江戸に生れ、家を飛出し、土方から、壮士節を歌い歩いてトコトットのラッパ節、袴さらさらホワイトリボンのむらさき節からストトン節、ア、ノンキだねに至るまで作詞数知れぬ演歌師の大本家。「茶太郎新聞事務所」と看板をかけていた。震災後演歌道衰退に憤り、某稲荷境内に天龍居精神修養会を起し、松葉を常食して半仙生活を送り、霊波療法を施し、晩年屑屋もやって一九四四年歿、七十三歳。本名平吉。
とあるが、添田唖蟬坊こと添田平吉の生まれは神奈川県大磯である。
「私は、黴にも花が咲く、といふことを唄ひたいのである。」は、添田唖蟬坊の『浅草底流記』（近代生活社）の「序」に掲げられた言葉である。

2. 生涯
神奈川県大磯に生まれる。14歳で上京し、機関士をしていた叔父の家に寄宿。東京見物中、浅草の小屋掛芝居をのぞいたのがきっかけで、その世界にのめり込む。汽船の船客ボーイになったものの2年で挫折。以後、横須賀でタコ部屋に入り、タコ部屋脱出後も、軍艦のカンカン虫（サビ落とし）をしたり、石炭の積み込みなどの仕事に従事していたが、18歳の時に壮士節と出会う。
東京・新富町にあった壮士演歌の本部に入り、社会改良を訴える。東京、横浜、横須賀間を流しながら幾度も往来する（少年期の荒畑寒村が見知っていたという）。

添田唖蟬坊（1920年）

30歳にしてようやく一家を構え、子もなすが（子は後の演歌師・添田知道）、妻子を生家に残して飄然と演歌の旅に出た。妻のタケは、裁縫、唱歌で学校に勤め、自宅にも弟子をとって、知道を育てた。その後、唖蟬坊が社会主義に走った際も、彼女もまた運動の一端に加わるという開明的な女性だった。
唖蟬坊の旅は名古屋、岐阜に寄り、伊勢路から大阪へ向かった。大阪での

活動の結果、道頓堀界隈の露店の開祖になったとも言われている。大阪では不知火山人の名で「ロシャコイ節」等を唄って大いに受けたものの、日露戦争をあおる自分の歌に疑問を感じたという。当時、日露間が風雲急を告げる中で、唯一反戦の立場をとっていた黒岩涙香の『萬朝報』の説にも大いに動かされていた。再び東京に戻ると、一層疑問に思い、反戦の立場へと更に傾いていった。

日露戦争後、堺利彦を知って社会主義運動に入る。当時、堺は社会主義の宣伝のために演歌の利用を考え、「ラッパ節」で有名になっていた唖蝉坊に相談したのである。唖蝉坊の『唖蟬坊流生記』によれば、「私は堺枯川を元園町に訪ねた。敬う気持ちがあったが、着流しに兵児帯を無造作に巻きつけて、「わたし、堺です」と出て来た、そのはじめての印象がよかった・・・私は「ラッパ節」を新作した。「社会主義喇叭節」と題したら、「社会党喇叭節」の方がいいというので、私は党という字が嫌だったが、それに従った」そうである。

以降、添田唖蝉坊の名で「あゝ金の世」などを作った。演歌師として盛名をはせ、明治後期から大正にかけて「マックロ節」「ノンキ節」「デモクラシー節」など数多くの演歌の作詩を行っている。

日本社会党の結成とともにその評議員になったものの、唖蝉坊の活動は、あくまでも演歌を利用したものであった。演説会ならば「弁士中止！」をくらえばそれで終わりであるが、彼の場合は、中止をくうと、そのまま笑いながら、「では演説は中止して、歌をうたいましょう」と演歌をやり始める。そのため「中止！」を二度もくらうのは唖蝉坊だけだといわれていたという。また、堺らの研究会でも始終、唖蝉坊は唄わされていたそうである。堺為子の回想によれば、会が終わると唖蝉坊の先導で、山川均、大杉栄、荒畑寒村、為子ら女連も一緒に唄っていた。ただ、堺だけはちっともメロディが出なかったらしい。

社会主義運動に入った唖蝉坊だったが、彼の資質はむしろ非政治的であり、「過去の演歌はあまりに壮士的概念むき出しの“放声”に過ぎなかった」という回顧のとおり、風俗世相を風刺した「むらさき節」や晩年の「金々節」などによくその本領を発揮した。

昭和に入ってからは演歌師を廃業。四国遍路や九州一円を巡礼、9 年近い放浪の生活を送る。

1944 年(昭和 19 年)2 月 8 日死去。73 歳。

3.「進め新体制」という長詩

妻のタケが 1910 年(明治 43 年)に 27 歳の若さで亡くなった後も、唖蝉坊は句会を開いたり、演歌の新作と発行、演歌組合青年親交会の設立、小誌『演歌』の発行と各誌への執筆、講演会等々、精力的に活動していたが、1923 年(大正 12 年)の関東大震災に遭ってから、自己の内在探究に心は赴いていたようである。晩年の彼はとりわけ仏教に深く傾倒していた。やがて彼の精神志向が、そのまま国政翼賛に傾き、1940 年(昭和 15 年)秋に「進め新体制」という長詩を作るに至っている。「新体制　新体制　殻を破って

生れた新体制」(『唖蟬坊流生記』に序詞としても掲載)というものである。

唖蝉坊晩年の詩とはいえ、これが唖蝉坊という人間とその生き方にとって、どう意義づけられるのか、一考されるべき問題だろう。

4. 社会主義者として ― 堺利彦らとの交流「戸山ヶ原の運動会」

前方右端　添田唖蝉坊　1906 年(明治 39 年)秋

出典:ウェブサイト　初期社会主義/1906→1909　http://1906-1909.blog.jp/archives/1020404930.html

参考資料

『日本番外地の群像』玉川信明　社会評論社　1989 年

『添田唖蝉坊　唖蟬坊流生記』添田唖蝉坊　日本図書センター　1990 年

『大正アウトロー奇譚』玉川信明　社会評論社　2006 年

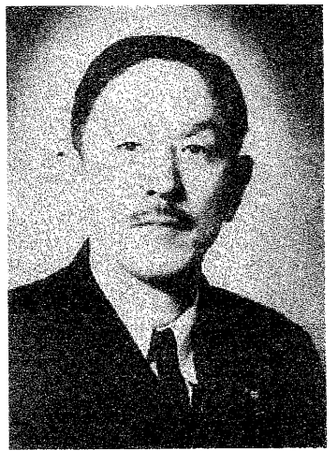
『流行り唄五十年―唖蝉坊は歌う』添田知道　朝日新書　2008 年

ウェブサイト「コトバンク」　など

中野正剛の台湾原住民族同化政策論のまなざし

金羽木徳志

この当時（1906年）、台湾の東部は東洋一と言われる海抜200mの断崖絶壁がどこまでも続き、花蓮（ホワリエン）という場所ですが、そこにある港を地形の険しさから日本人はユカレンコウ、つまり「行かれん港」と呼んでいました。さらに南下すると今でこそ開かれた台東がありますが、この当時は船でもなければ行くことができない場所でした。台湾総督府はここ台東に「加路蘭浮浪者収容所」を作りました。1914年にはその対岸約30km沖合にある緑島（現地の言葉ではリュイタオ）、この当時は火焼島（フオシャオ）と呼ばれていましたが、ここに「火焼島浮浪者収容所」を作ります。現在はスキューバーダイビングや温泉がある観光地ですが、元々は島流しに使われていた場所です。江戸時代、無宿人を石川島に収容した隔離政策がそのまま台湾の原住民に対して打ち下ろされたのです。更生、帝国臣民として心を入れ替えてやり直しなさいというお題目のもと、流刑、島流しがおこなわれたわけです。



このような「浮浪者対策」に対して非難を浴びせたのが頭山満率いる玄洋社門下の中野正剛代議士でした。すでに東京朝日新聞の記者としてシベリア出兵を「泥棒猫以下」と痛烈に反対し、パリ講和会議における日本外交を「退嬰的旧外交」と批判して注目されていました。そして、1920年5月の第14回総選挙で「台湾だけではなく、朝鮮も日本と同様に扱え！政府は口には同化を説きながら、『鮮人』には帝国臣民が一様に享有する憲法規定の権利すら与えない！朝鮮を同化するつもりなら、先ず根本法たる憲法を彼地に於いて有効ならしめよ！」という急進的内地延長主義－外地の台湾、朝鮮、樺太を内地の日本の一部に扱え！－を掲げて帝国議会に登場しました。その年の第44回帝国議会で、台湾総督の田健治郎（華族出身で衆議院議員、貴族院議員、逓信大臣、農商務大臣、枢密院顧問を歴任した大物代議士。孫は社会党代議士だったあの田英夫です。）に対して中野は「わたしは問ひたい。幾多の残忍なる事が台湾に伝へられている。台湾の学生でも、何でも本島に於いて、不穏な言動をなせば、行政処分を以て、之を島流しにすることができる。人類の住むに適せざる火焼島に流すことが出来る。その島流しの期限は、無限である。台湾総督の一存で陛下の臣民をかかる考慮なき処分に処し得るということは、私は大変な間違いではないかと思う」と噛みついたのです。

中野の主張は口先だけの日本人扱いではなく、ちゃんと同じ「陛下の帝国臣民」として接すれば抵抗は起きない。そして、台湾の同じ陛下の臣民を台湾総督府の一存で人類の住めない火焼島に無期限で島流しにするのは間違いだ！ということですが、中野の怒りは本当だし、台湾の同じ陛下の臣民がこんな目にあっていることに心を痛めて寄り添おうとする、しかし、寄り添ったところで一票にもならないことがわかっていても台湾民衆の強いられている現状を訴えるその誠実さと優しさにウソ偽りはありません。これはもうドブ板政治などと言うようなものではない、選挙に出る時だけは調子のいいことを言って選挙に当選したら知らん顔を決めたり、所属政党を鞍替えする昨今の政治家は少しは見習え！と言いたいくらいです。中野の主張が、あまりにもぶっ飛んでいるように感じたり、「おいおい大丈夫か…」と失笑してしまうとすれば、それはこの時代にいなかった、後からの目線で物事をみることができる私たちの感じ方でしかありません。現にこんな中野の急進的内地延長主義に共鳴して一票を投じて国政に送り出した内地の有権者たちがいたのは事実だし、それを失笑するだけでは問題はみえないのではないでしょうか。

問題は中野が同じ陛下の臣民の台湾の原住民が人類も住めない火焼島に無期限の島流しになっていることに怒りを持ち、心を痛めながら寄り添ったにもかかわらず、原住民の姿が見えなかったことです。台湾、あるいは朝鮮や中国でもいいのですが、日本に対する抵抗がなくならないのは同じ陛下の臣民として接しないからであり、逆に言えば、ちゃんと陛下の帝国臣民として接すれば、その気持ちが相手にも伝わると中野は確信を持っていたということです。そうは言っても誠心誠意、真心を込めて相手に接したからといって、それにどう応えるかは相手の判断であり、必ずしもこっちが思うように相手が応えてくれるかどうかはわからないものです。それどころか人の親切に後足で砂をかけたり人の顔に泥を塗る人でなしだっているではありませんか。

まず最初に慎重にならなければならないことは、こっちが向けるまなざし、こっちの物の言い方であり、こっちが差し出す手は相手が見つめ返せることができるまなざしなのかどうか、あるいは相手が応答できる物の言い方、こっちの手を握り返すことができる言動でなければなりません。植民地支配をしておいて見つめ返せることができるまなざしも、応答できる物の言い方もないだろう！と言ってしまえばそうですが、中野はそのようには思わなかったでしょう。なぜなら、台湾や朝鮮、中国で日本に対する抵抗がなくならなかったのは同じ陛下の臣民として接しないからだと中野は主張し、日本が植民地支配をしているとは考えなかったからです。しかし、台湾や朝鮮、中国で民衆が抵抗している理由は同じ陛下の臣民として接しないからということではなく、植民地支配して一方的に同じ陛下の臣民として接しようとするからであり、日本人の中野のような人間味にあふれた態度こそが許せなかったのです。それが中野には見えなかったのです。それは何も中野だけに限ったことではなく、日本の戦争が「欧米列強からのアジア独立のための戦争」と信じていた人たちもいましたし、今もなお日本がアジアで何をしたのか知ろうともしない、韓国人の元徴用工や従軍慰安婦たちが何を怒っているのか理解できず、戦争中の歌や標語をネットでかき集めては当時の人々の真摯な生き方をトンデモと嘲笑する現在に続いていることを銘記しなければなりません。

天皇制との個人的な関わり

ぽんきん

2007年頃からほぼ毎日のようにミクシー（アカウント名、ぽんきん）やツイッター（@pon_kin）などのSNSに日記代わりの短文を書いていて、その半分くらいが反天皇制コメントです。なんでこんなに飽きもせず天皇制批判をしてるのか、記憶の糸をたぐり寄せてみるとつらかった生育歴と黒歴史が浮かび上がってきます。誰得かわかりませんが少し振り返ってみたいと思います。

私は今年60才になります。父親は自衛官上がりの癇癪持ちで、今でいうひどいDV男でした。母親は発達障害があったのではないかと後になって思うのですが、自分で物事を決められない（決められなくされた）ぼんやりした感じの人でした。母親は父親によく殴られていましたし、私もそんな両親から愛されたり守られているという実感がなくて、中学まで寝小便が止まらないような精神的に不安定な子でした。

4年生の頃だったと思うけど、夜中に父親に寝小便を見つかって大声で怒鳴られてさんざん殴られたうえ裸で外に放り出されたこともありました。当時長屋住まいだったので近所中に知れ渡っていたと思います。隣は薄い壁一枚で同じ学年の子が住んでいるという悲惨さでした。そういうことが一度や二度ではない暗い子ども時代でした。

そんな私はなんでもいいから親に認めてもらいたいという思いが強かったのか、まったく目立たない子だったのに児童会の役員選挙に立候補したことがあります。立候補の演説で登壇するとき、なんと壇上の日の丸に一礼したことをよく覚えています。大人の振る舞いを見ていて、そうすれば受けると思ったのかもしれません。嫌な子ですけど、ここまでねじ曲げられてたんですね。そしてこれがトラウマとなります。

思春期から高校生のころになって、自分の置かれている環境を客観視できるようになると、家が家父長制そのものであること、それが植民地支配と侵略戦争の反省なく戦後も続いている天皇制の縮小コピー版であること、身分差別の天皇制が「日の丸」「君が代」「元号」「戸籍」といった形で人の日常生活に浸潤し

ていることを知ります。そして小学生だった自分の行為がいかに恥ずかしいものだったかを悟るのです。ちなみに私の本名は修身といいますが、これは東京裁判中に巣鴨プリズンで病死した海軍大臣でA級戦犯の永野修身から父親が取ったのもので、これも自分にとっては十字架のようなものでした。

学生のころは学生放送局に所属していて、釜ヶ崎のドヤに泊まり込んで取材して回ったり、福岡の「ジャズ君が代」事件を題材にした録音構成番組を作ったりしていました。会社勤めする気がゼロだったので高校教員になりました。80年代の大阪の公立高校にもじわじわと「日の丸・君が代」攻撃が迫ってきていました。89年に日教組が分裂したときは、大阪では主流派の闘わない全教（共産党系）にも、「教育の靖国」教育塔を護持する日教組にも行かず、独立系の教職員組合に加入しました。卒業式・入学式では、校門で全教系、日教組系、独立系（私）、外部の中核の人の4人でそれぞれ別々のビラを黙々と撒くということが何年か続きました。92年の学習指導要領改訂で「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする」という文言になったのを機に、もうこれ以上責任を持てないなと思って教員をやめました。
そのころには結婚して子もいたのですが生活が不安定になります。家庭教師や塾・予備校の講師をしながら、式で「日の丸」を引き摺り降ろして処分を受けた元同僚が起こした国賠訴訟を支援する会の事務局を引き受けたりしていました。その後、離婚して子ふたりを引き取り、外に働きに行けなくなったので翻訳などをしてこれまで食いつないできました。

子たちの入学式・卒業式の「君が代」ではずっと座っていました。子たちが通う学校の校長に「日の丸」掲揚と「君が代」斉唱をやめるように申し入れたり、式当日一人でビラ配りをしたりしていました。子たちは巣立って一人になってしまいましたがそんな感じでずっと反日です。今度の天皇即位「奉祝」10連休の間は自宅に黒旗と「血筋で誰かを敬ったり尊んだりする人は、血筋で誰かを蔑んだり卑しんだりするよ。身分差別の天皇制は今年中に廃止しよう」と書いたプラカードを掲げるつもりです。ナルヒトと私は同い年なので、どっちが先にくたばるか競争です。それは戦争と天皇制廃止の競争でもあると思っています。死ぬまで自分を裏切らずにいたいと思います。

【熊野・新宮探訪】

火炎の龍に魅せられながら、八咫烏、補陀落渡海、百年の志をみつめる

南野流人

5 年ぶりに訪ねた熊野・新宮。熊野は幾重にも積もる様々な歴史や信仰が層を為しており、近世徳川幕府において「一国一城」の原則を除外して新宮に城を構えさせたように、熊野がなお特別な存在としてあり続けてきた。また、近代に至るまで太平洋の大海原にひろがる黒潮の道を流れ寄り来る新しい文物や人、思想を受け入れ、それらが無数に重なり結びついて熊野を形作っている。その一つ一つを丁寧に解きほぐしながら熊野を見ていくことで、現代もなお多くの人々が熊野に惹かれる訳と、熊野の土壌で大逆事件に至るまでの初期社会主義が芽生えた理由がみえてくるのではないかと思う。

前回は縄文期より深く信仰されてきた熊野の地を改めてゆっくり巡り、新宮では大逆事件の故地も訪ね歩いた。今回の旅は 2 月 5～6 日の 2 日間というタイトな日程だが、神倉山の御燈祭の見学と大逆事件犠牲者の墓参りをメインに行程を組み立てて車を走らせた。

熊野を覆う「記・紀神話」の陰影

初日の早朝、那智大社と青岸渡寺、那智の滝、補陀洛山寺を参拝。大学のゼミ合宿で泊まった宿坊の縁側から見た青岸渡寺の朱塗りの三重塔と那智の滝の荘厳な風景に魅了されてから何度も訪れている場所だ。

もともとは那智の滝そのものを崇拝した原初的な自然信仰に由来するものが、熊野修験や西方浄土信仰が結びつき、のちに熊野詣の構成要素となっている。末法思想が世をひろく覆っていた平安末期、極楽往生を望んだ後白河院が 34 度も熊野を訪ね、その折にもともとそれぞれ独自の信仰を持っていた那智、速玉、本宮の三社を参拝したことや熊野修験の行者たちが『参詣曼荼羅絵図』を携えて各地を勧進したことで、のちの熊野詣が根づいた。また、ヤマト政権による列島支配の正統性を内外に誇示するために都合よく再神話化された『古事記』『日本書紀』の神話（以下、「記・紀神話」と記す）に登場するイザナギ・イザナミ・スサノオの三神が熊野三社の神々に付会され、また逆に同二書の神武東征譚に熊野の八咫烏が挿入される等、ヤマト王権と熊野との決して浅くない関係が見てとれるだろう。

那智の滝から那智駅周辺まで下ると補陀洛山寺と浜の宮がある。浜の宮の境内には明治期に建てられた神武天皇の石碑がある。河内の大王 ナガスネヒコに敗れて兄を失い熊野灘へと敗走したイワレヒコ（神武）がこの浜から上陸し、一時的な宮を構えたという伝承があるためだ。恐らくは、古くから伝えられてきた土着の神迎え（あるいは祖霊を迎える）の神事に「記・紀神話」の「神武東征譚」が付会したものと思う。他にもイワレヒコをヤマトへ道案内したという八咫烏（ヤタガラス）伝承や神剣を奉じてイワレヒコに従った高倉下命の伝承など熊野には「神武東征」に貢献したことをやたらと強調したい向きがある。しかし、これらも神武東征の史実の名残では勿論なく、5～6 世紀のヤマト政権が熊野を制圧する中で、熊野の土着の神々の神話をヤマト王権に都合よく再神話化し、「記・紀神話」に統合するという過程を経たものと解する。

補陀落渡海ー熊野の異界性について

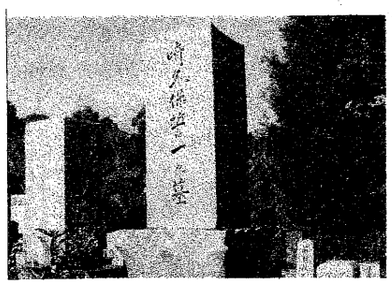
補陀洛山寺という寺がかつての浜の宮王子社のあった熊野三所権現に隣接している。代々、ここの住職は西方浄土をめざして戸を釘で打ち付けられた船に乗り、わずかな水と木の実を頼りに読経を続け即身成仏した。これを補陀洛渡海と呼び、『那智曼荼羅図』にも観音の住まう補陀落をめざした渡海船が描かれており、即身成仏後に回収された船から遺体を引きあげて境内の墓地に歴代の住職らが埋葬されている。『熊野年代記』『吾妻鏡』等によれば、868 年～1722 年までの 850 年の間、25 人の補陀落渡海が繰り返された。また、熊野川が熊野灘へと至るその南端に蓬莱山を磐座とする阿須賀神社があり、ここの西俊行宮司は篠笛の奏者で、映画『熊野から』にも出演されている。秦の始皇帝が東海に不老不死の仙薬を求めさせた徐福伝説の地である。

このように熊野は異界との境を接し、熊野が異界そのものとも観念された。おそらくは、海の彼方にある祖霊が住む常世国（琉球ではニライカナイ、吐噶喇では竜宮伝説の色濃い甑島）という黒潮の海人が共有してきた観念と熊野を黄泉国とする観念と道教の神仙思想とが重なりあい、仏教の西方浄土の思想の広まりと共に補陀洛渡海へと結実したのだと思う。

ここの参道は、かつて住職らが西方浄土へと旅立った浜にまっすぐ通じている。現住職の話では海から神を迎える祭りが隣の三所権現で最近おこなわれたらしく、浜には神迎えのための笹がそのまま飾られていた。

百年の志を継ぐ思いにふれる

那智を発ち、昼より大石誠之助、高木顕明、峯尾節堂ら大逆事件の犠牲者が眠っている新宮市の南谷墓地に着く。ここにはこの 3 名の他、大杉栄・伊藤野枝らも寄稿した『民衆の芸術』を創刊した奥栄一、崎久保誓一や高木顕明の弁護をした平出修の事務所で勤務し、公判記録を筆写して石川啄木に読ませた和貝彦太郎（夕潮）、熊野の代表的作家の中上健次も眠る。あわせて墓参し墓前に梅の枝を添えた。2010 年に新宮市で開催された「『大逆事件』100 年フォーラム in 新宮ー闇を翔る希望ー」に参加した時にお世話になった「熊野大学」の東輝彦さんに墓地や関係する地を案内していただいた時は、峯尾節堂の墓は鬱蒼とした木々に囲まれ、臨済宗妙心寺派の僧籍は 1997 年に「擯斥処分」が取り消されたものの、一人で探すには難しく思われた。昨年、同派によって「平和人権の誓い」の碑が新たに建立され、草木も手入れされている。



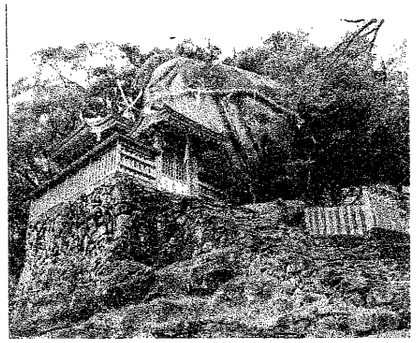
新宮市・浮島にある大逆事件資料室に立ち寄り、看板に書いてある番号に電話した。当日の連絡にも関わらず、「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会事務局長の濱野さんがすぐに来てくれた。崎久保誓一の墓へ行きたいというと、墓地まで案内してくださった。御浜町にある墓の碑銘は荒畑寒村が揮毫したものだ。崎久保の御子孫が生家をほぼ当時のまま使っていらっしゃるという。大石宅に新宮支局を置いた『牟婁新報』の記者として崎久保は大石や成石平四郎らと交流し、「大逆事件」で逮捕され死刑判決後に「特赦」で無期懲役刑となり、19 年間、秋田監獄に収監された。ヒロヒト即位の「恩赦」で 1929 年に仮出獄され、1955 年まで生き、死後に「獄中手記」も見つかっている。秋田監獄の 19 年間、仮出獄から敗戦までの 16 年間、そして戦後の 10 年間を崎久保はどう思いながら生きたのか。顕彰はまだこれからという段階とのことだ。

新宮へ戻り、速玉神社横にある佐藤春夫記念館で企画展『大石誠之助とはどんな人？』が開催

されているので、濱野さんに案内していただきながら見学した。昨年1月24日の処刑日にあわせて大石が新宮市名誉市民になったのを記念しての展示会だ。解説資料集も充実しており、横浜事件で言論弾圧を受けた木村亨が1946年に熊野自由人倶楽部を立ち上げ大逆事件犠牲者の復権運動を企図したことに始まり、荒畑や幸徳秋水の甥の富治らの新宮訪問や和貝夕潮が実行委員長を務めた『『大逆事件』50周年紀南関係者追悼記念行事」が新宮で開催され、那智妙法山に「人民解放運動戦士之碑」が建立される（1965年）など熊野での先進的な取り組みは、「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会にしっかり引き継がれている。それにしても、新宮の方々の文字通り「志を継ぐ」地道な取り組みにはまったく頭が下がる思いだ。

展示会を見終えた後、遊郭跡地や旧川原町を散策しながら、林業や鉱山を基礎にして様々な文物や思想が入ってきた新宮の近代史について、濱野さんから示唆を与えていただいた。そして、大逆事件資料館にもどり、ゆっくり見学した。快く半日もお付き合いしていただいた濱野さんに感謝申し上げたい。

御燈祭ー火炎の龍が新宮の夜を焦がす



2月6日、御燈祭の当日。ゴトビキ岩を御神体（高倉下命）とする神倉山は、三足烏（ヤタガラス）や那智の大瀧とともに熊野信仰の最も重要な要素を占めており、熊野の神々は最初にこの岩に降臨したと伝えられており、その神々を新たにつくった速玉大社に祀ったことから、新宮という地名を残す謂われとなっている。昼過ぎに新宮駅前の寿司屋で秋刀魚のすがた寿司を食べた後、速玉大社で入山許可証をもらって神倉山に登った。現在でも、神倉山の頂きに聳えるゴトビキ岩へと続く538段もの急峻な石段は、人を容易に寄せつけぬ威容を誇っている。

毎年2月6日の夜更けに挙行される燈灯祭では、昼に王子ヶ浜で禊（潮垢離）を済ませた上がり子（祈願者）が三社参りをしながら夕刻に神倉山の頂を目指す。最近では、新宮市外からの祈願者も増え、泥酔した者や血気盛んな若衆らが暗闇の中で怒号が響きひしめき合い松明でしばき合うなどさながら喧嘩祭りの様相を呈しているが、そういったことも含めて御燈祭の主宰者は許容している。そういった喧騒の最中、松明を掲げてゴトビキ岩周辺に取りついた新宮の上がり子2000名が白装束に身を包み、宮司らが神事をおこなった後、介釈によって鳥居の扉が開門されると同時に一斉に石段を駆け降りていく。勢いあまって幾人も石段を転げ落ち血だらけになりながらも降っていく。その様は火炎の龍がうねりながら山を降りるかの如くで、今でも新宮の人々を強く惹きつけている。

第44回 橘（たちばなむねかず） 宗一少年墓前祭/講演会

鷲尾 拓

夏の暑さがしぶとく残る2018年9月16日（日）、名古屋で開催された第44回橘宗一少年墓前祭/講演会に参加して来ました。

「橘宗一」と聞いても、一般的には知る人は少ないと思われます。彼は近代日本のアナキストとして著名な大杉栄の甥（妹の子ども）です。関東大震災後の混乱の中、1923年9月16日、伯父の大杉栄とその妻・伊藤野枝と一緒に憲兵に連行され、東京憲兵隊本部で暴行の上、首を絞められて殺されました。大杉栄と伊藤野枝も同様に殺されました。いわゆる「甘粕事件」です。

宗一の父・橘惣三郎は現在の愛知県あま市出身で、1927年4月12日（宗一少年の誕生日）に名古屋・日泰寺の墓地に墓碑を建てました。墓碑の背面には次のように刻まれています。

「宗一（八才）ハ再渡日中東京大震災ノサイ大正十二年（一九二三年）九月十六日ノ夜、大杉栄　野枝ト共ニ犬共ニ虐殺サル」（原文は縦書き）

あの当時、これほどの強い表現を遺した惣三郎氏の無念の気持ちと怒りとが伝わってくる文言です。

墓前祭の後は、明治大学の飛矢崎雅也先生による「自由な共同性を求めて―大杉栄における社会と自由」という講演会に参加しました。「大杉栄のアナキズムにおける自由と相互扶助の関係を考えることにより、現代に生きるわれわれが自由と社会の関係を探るための一助とする」という内容で、大杉の考えた、相互扶助を基礎理念とする社会像＝多様性社会としての自由連合社会について、という内容でした。

質疑応答は盛況で、様々な議論が交わされました。

- 人間一人ひとりの自由と、共存社会での自治について、どう折り合いつけていくのか？
- アナキズムを曲解した自由（単なる放埒）を述べたてる者をどう扱うか？
- 米騒動（2018年はちょうど米騒動勃発から100年）への大杉の関わりは？

等々…。

講演の最後に、大杉豊さん（大杉栄の甥＝橘宗一君のいとこ）から、横江嘉純作の大杉栄のブロンズ首像の紹介がありました（ブロンズ像を豊さんに渡されたのはパキスタン在住の督永忠子さん）。

講演会後の懇親会も大いに盛り上がり、アナキスト、そしてアナキズムに関わる人々がまだまだいるのだ、という気分になった名古屋でした。

南島逍遥　奄美大島篇

南野流人

昨年 8 月 28－31 日の行程で奄美大島を旅して考えたことを少し書き留めておきたい。奄美は『日本書紀』『続日本紀』に「海見嶋」「阿麻彌人」「奄美」とあり、筑紫の太宰府跡からは「木偏＋奄　美嶋」と書かれた奈良時代の荷札木簡が出土している。近年クローズアップされている筑紫大宰府の出先機関とする喜界島問題を置いておくとして、奄美群島は琉球でも薩摩でもない独自の歴史と文化を築いてきたと言える。幼少の頃に母から聞かされた大島紬を丁寧に織る親戚の御婆さんの話や親戚の結婚式で見た華やかな琉装を身に纏った伯母さんの古式舞踊。関西生まれの鹿児島人二世の私には何処と無く懐かしくもあり、私のルーツに係る「原罪」的な関係故に気軽に立ち入ることが憚れ、よそよそしく目を伏せてきた島である。

2000 年代初め、元ちとせが「ワダツミの木」を歌うことで学生の頃に南方系神話やワタツミ信仰を研究していた私の心象風景に奄美が近づき、最近では城南海や中孝介の歌声が染みる。その奄美の旋律を聞く度、沖縄のそれとはどこか一線を画するものを感じる。定年を機に関西から島へ戻った民謡居酒屋の店主は「沖縄を陽とすれば奄美は陰。決してメジャーにはならない」と言う。それは奄美の島人たちが辿ってきた歴史に由来するものではないだろうか。名瀬の港町の民謡居酒屋で奄美の三線と島唄の旋律にあわせ、吐噶喇列島にも伝わる奄美太鼓を叩かせてもらいながら、そんな拙い思いを巡らせていた。

西郷隆盛と奄美

17 世紀初頭の薩摩藩による琉球侵略以来、奄美群島を薩摩の植民地として収奪し、明治維新後は日本帝国の版図として鹿児島県に併合して「天皇の臣民」と扱われながらなおも収奪の構造は近世幕藩期と変わらぬ過酷なものであった。昨年の NHK 大河ドラマ『西郷どん』奄美編では、薩摩の過酷な植民地支配下にある奄美の人々の情景について、奄美人を薩摩人以下として差別・抑圧し、強制的に生産させたサトウキビを強奪する薩摩役人の鬼畜ぶりを描きつつ、奄美の美しい景色と哀しい島唄の旋律が重なって視聴者により一層の涙を誘った。

現在、奄美大島北部の龍郷にある西郷の島妻 愛加那（愛子）の実家では、兄の御子孫の龍家が大切に愛加那が暮らした家を守り、家に伝えられている西郷や愛加那の文物や伝承のほか、当時の龍郷の暮らしについて、訪れた旅人たちに語ってくださる。余談だが、西郷と愛加那の間には菊次郎と菊草（菊子）の二人の子どもがいる。菊次郎は隆盛の長男だが、愛加那が正妻の子どもである次男の寅太郎に憚って「菊次郎」と名付けた、とするのが通説だ。しかし、龍家では「西郷が台湾に赴任している時に現地で長男をもうけており、次に生まれたので「菊次郎」となった」と伝えられている。龍家の現当主は台湾にいる西郷の御子孫に会ったが、「名前は公開してくれるな」との要望に従い、菊次郎が西郷の次男であることのみを私に教えて下さった。

流刑地の龍郷で奄美の人々に対する過酷な状況を目撃した西郷隆盛（菊池源吾）は薩摩役人を糾弾し、薩摩本国の大久保利通に宛てた手紙で改善を訴えている。史実では流罪を許された西郷がその後、奄美について何らかの改善策をおこなったという記録はない。帰国と同時に倒幕に奔走することになり、奄美政策を改革することが出来なかったというのが、南洲翁に同情的な幕末維新研究者の大方の見立てであろうが、

果たしてそうだろうか。奄美のサトウキビは薩摩藩が最新の武器や技術、近代工業の導入には欠かせない資金源であり、その潤沢な資金力によって幕藩体制改革や倒幕運動を先導できたことは、藩政の実権を握っていた西郷・大久保は百も承知であったはずである。即ち、薩摩藩は植民地である奄美を踏み台にする事で近代産業化をいち早く成し遂げ、大量の武器と資金力で徳川幕府を倒して明治新政府を樹立した。さらに欧米帝国主義に習い、アイヌモシリ侵略（北海道開拓）や琉球併合（琉球処分）へと躊躇なく進み、台湾、朝鮮、中国などのアジア・太平洋諸地域の侵略・植民地支配へと至ったのが実際のところだろう。

西郷が政府筆頭参議を辞めた後、鹿児島県令の大山綱良をはじめ西郷派が鹿児島の県政で多数を占めて「独立国の如し」と長州藩閥の首領 木戸孝允（桂小五郎）を激怒させた。こうした鹿児島県内の政治情勢下でも、西郷は愛加那の子どもを鹿児島本土に呼ぶことはしても、自らの命を救い生かしてくれた植民地・奄美の改革をおこなうことはしなかった。むしろ、士族救済のためと称して黒糖独占企業の「大島商社」を設立させ、奄美の島人に「黒糖地獄」を強いたのだ。奄美大島の農地の 9 割以上をサトウキビ・プランテーション化し、低賃金・高値売りで徹底的に島人を搾取し、人口の 3 割をヤンチュ（債務奴隷）に陥れたのである。多くの鹿児島県民をはじめとする南洲翁を敬慕する方々には失礼ながら、「敬天愛人」の「人」とは何を指すのかとその程度が知れてしまう。

沖縄の伊波普猷は明治期の沖縄人が「日本」を見る時の二面性を挙げて、「救世主のウフ（大）ヤマト＝日本」「圧政者のヤマト＝薩摩」と呼び、薩摩ではなく天皇の赤子として日本に包み込まれたいという沖縄人の屈折した心情を吐露しているが、（奄美人にとっての西郷は龍郷など西郷個人への敬慕の情がいまなお色濃い地域性があることは含み置くとして）西郷は日本帝国主義の歴史としてはこの「圧政者のヤマト＝薩摩」の系譜に紛れもなく連座するものだろう。

現在も続く植民地主義的構造

西南戦争後に「大島商社」は解体したが島外の資本による収奪構造は温存され、植民地として奄美群島への収奪は続いた。1904～40 年までのブラジル移民は鹿児島県内でも 3 番目に多く、関西にも奄美群島出身者が多く出稼ぎ移住した。敗戦後の米軍支配下の奄美群島政府を経て、返還（再併合／1953 年）後の「奄美群島復興特別措置法」（現在は「奄美群島振興開発特別措置法」）下で現在に至るまで鹿児島県内でも貧困地域に相当する。例えば、2014 年度の奄美群島の一人当たりの郡民所得は 209 万円で、鹿児島県の一人当たり県民所得（238 万円）の 87.5%、沖縄県の一人当たり県民所得（212 万円）の 98.2%、一人当たり国民所得（286 万円）の 72.9%に過ぎない。※数値は『奄美群島振興開発総合調査報告書【要旨版】』（鹿児島県／2018 年）による。

基幹産業であったサトウキビと大島紬や第二次産業の低迷により、若い人々を中心に島外へと職を求めて鹿児島本土や関西へと流れている。1950 年の調査では 20 万人の人口が現在 10 万人となっている。安倍政権が強引に推し進めている鹿児島本土以南の南西諸島への自衛隊配備強化を問うにあたっても、単なる反戦・反基地に問題を切り縮めるのではなく、奄美の植民地主義的構造の延長線上にアベの戦争体制を位置付け、問うべきだと考える。

次回の奄美再訪では島尾敏雄、田中一村の関係史跡を訪ね、ヤポネシア論を再考してみたい。哀しくなるほど美しい笠利の海を見ながら、再訪を想像した。

読書会報告(2)

鷲尾 拓

機関誌前号でもご紹介した通り、私たちは不定期に読書会を行っています。前号ではまもなく終了とお伝えしましたが、いま現在もテクストとして用いている書籍は、ピョートル・クロポトキンの『近代科学とアナーキズム』と、ピョートル・アルシノフの『マフノ運動史 1918-1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』です。

※テクスト情報

(1)ピョートル・クロポトキン

『近代科学とアナーキズム』

『世界の名著 53 プルードン／バクーニン／クロポトキン』所載

猪木正道・勝田吉太郎編 中央公論社 1980 年

(2)ピョートル・アルシノフ

『マフノ運動史 1918-1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』

郡山堂前訳 社会評論社 2003 年

1.『近代科学とアナーキズム』

ようやくクロポトキンによるアナーキズム概念のまとめに至りました。博識なクロポトキンですので、まとめ段階でも相変わらず、ジャコバン主義者、フーリエ主義者、ブランキストについての批判的考察が出てきます。パリ・コンミューンに絡んでようやくバクーニンも登場しています。

次回の読書会で終了予定です。

2.『マフノ運動史 1918-1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』

ロシア革命時のウクライナの内戦・革命運動―マフノ運動と並行して勃興した民衆運動と権力側の運動、外国勢力の介入―について「マフノ運動」を俯瞰してみる段階に至りました。

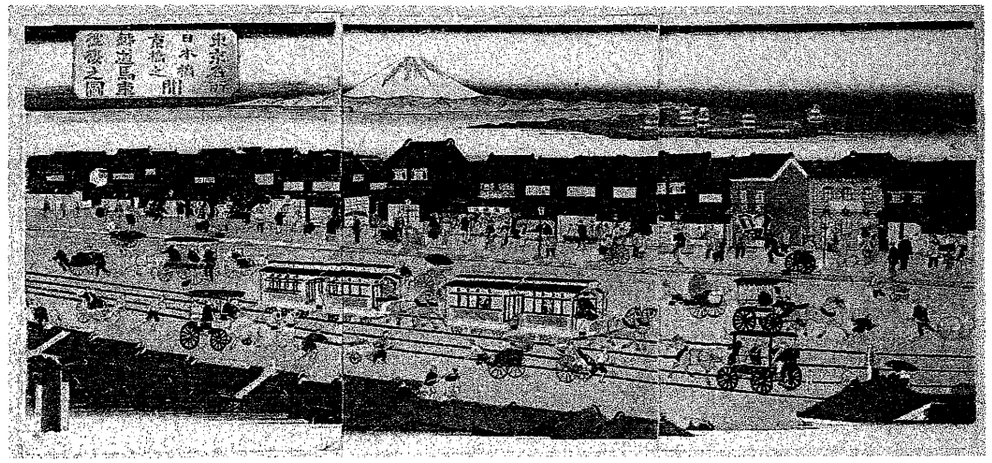
こちらは終了までには、あと4～5回の読書会が必要な様子です。

読書会への参加をご希望の方はぜひ下記アドレスまでご連絡下さい。

free_workers_federation@riseup.net

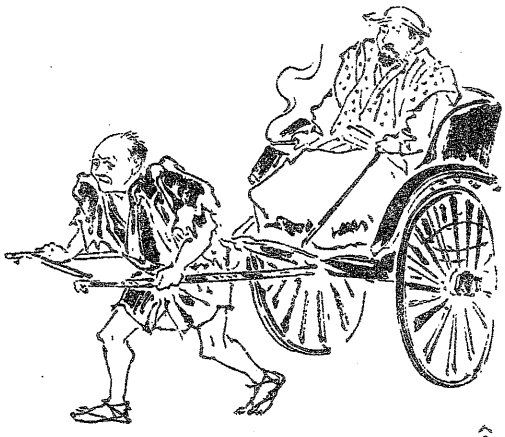
活動日誌(抜粋)

9月16日(日) 第44回橋宗一少年墓前祭・講演会
9月18日(火) 日朝国交正常化と東アジアの平和を！9.18キャンドル集会（エル大阪）
9月22日（土） 関西生コン労組弾圧抗議集会
10月6日(土) 戦争あかん！ロックアクション 御堂筋サウンドデモ
10月20日(土) とめよう！戦争への道 めざそう！アジアの平和2018関西のつどい
11月3日(土) 100周年記念「大阪の米騒動と方面委員の誕生」展（大阪歴史博物館）
講演会「大阪における社会事業の成立と方面委員」
11月7日(水) 映画「SAVE HENOKO」「宮古島からのSOS」観賞（シアターセブン）
11月13日(火) 人民新聞社山田編集長 控訴審 傍聴
11月24日(土) 原発も核燃もいらん！戦争いやや！2018関西集会
11月28日(水) 人民新聞社国賠訴訟公判 傍聴
12月11日(火) 人民新聞社山田編集長 控訴審判決 傍聴
12月23日(日) メーデー潰しの天皇即位反対大阪集会
12月26日(水) 大阪府警抗議行動
12月29日(土) 大阪キタ越冬闘争支援
1月23日(水) アナキズム読書会（SORA）
1月30日(水) 反差別講演会「LGBTに対する差別的言辞を考える」（大阪弁護士会館）
2月5～6日 熊野・新宮訪問
2月6日(水) 人民新聞社国賠訴訟公判 傍聴
2月24日(日) 新たな天皇制の登場を許すな！集会（PLP会館）
3月1日(金) 労働者共闘「勾留理由開示請求」傍聴
3月3日(日) GO WEST集会（国労会館）
3月5日(火) 映画「金子文子と朴烈」（シネマート心斎橋）観賞
3月9日(土) さよなら原発関西アクション集会（エル大阪）
3月10日(日) 反弾圧集会



目次

★奥宮健之と車会党
★添田唖蟬坊－近代日本の自由人たち(3)
★中野正剛の台湾原住民族同化政策論のまなざし
★天皇制との個人的な関わり
★熊野・新宮探訪
★第 44 回橘宗一少年墓前祭／講演会
★読書会報告
★南島逍遥－奄美篇



老躯車夫壮士を乗せて走る

編集後記

◆このところ各地の労働者組織への弾圧が甚だしい。長年、関西で反天皇制運動を牽引している労働者共闘への組対法適用を目論む不当逮捕・ガサ入れは天皇代替わりを目前に控えた明らかな政治弾圧である。断じて許してはならない。◆天皇も同じ血を流す人間であることを証明しようとして爆裂弾を実験し大逆事件で処刑された宮下太吉の墓碑（真宗大谷派甲府別院光澤寺）が無縁仏として撤去されようとしていることを新宮訪問時に「顕彰する会」の濱野さんに教えてもらい、佐藤春夫記念館で手に入れた『大逆事件ニュース』の最新号で詳細を読んだ。宮下太吉を二度殺すような真似をさせてはならない。墓碑保存運動に何か協力できることはあるだろうか。◆映画『金子文子と朴烈』を仲間たちと観た。貧民街に住み人力車夫をやりながら朝鮮人アナキストとして植民地解放闘争に身を捧げた朴烈。小さい頃に朝鮮在住の日本人に身売りされ戸籍もなく自力で学び逞しく生きてきた金子文子。3・1独立運動や関東大震災での朝鮮人大虐殺を煽り、朴烈らを大逆罪で吊るすことで問題を隠蔽しようとした天皇制政府。とても見応えのある作品だ。◆百田尚樹の『日本国紀』が本屋で平積みされベストセラーだと言う。受験偏重の薄っぺらい歴史教育の結果、アジア蔑視をばら蒔く右派メディアと安倍政権をバネにしたナショナリズムが大衆を蝕み、学問的にまったくデタラメな右翼デマゴギーが入り込む隙間を与えてしまった。戦後民主主義史観を鵜呑みにして歴史修正主義を鼻で笑ってきた左翼や知識人の怠慢が招いたツケだ。自身も含めて猛省しなければならない。◆3・11 から 8 年。大震災より 10 日後、釜石や女川で見た被災地の風景が目に浮かぶ。浪江町の社殿跡で舞われた「請戸の田植踊」に涙を流しながら見る年老いた女性の姿を深夜のテレビで見て、身を引き締めた。福島は電力100%の地産地消をめざして脱原発へ舵を切った。逆に関電・経団連と若狭湾の原発銀座の有力者たちは永続的な原発稼働・再建設を目論む。経験した「痛み」の差で済ますわけにはいかない。(M)

発行：自由労働者連合
宛先：〒540-0038 大阪市中央区内淡路町 1－3－11
　　シティコープ上町 402 号室　市民共同オフィス SORA
電話：０６－７７７７－４９３５（呼び出し）
Mail：free_workers_federation@riseup.net
URL：http://federaciodechifonproletoj.wordpress.com/

カンパ送り先：
郵便口座番号　00960－6－145783
加入者名　自由労働者連合

2019年3月14日発行
1部 300 円